

学生青年における友人との ケータイ・コミュニケーション観

— 現実世界と仮想現実世界の交流をめぐる —

野 呂 ア イ

View Points of Friendship by “Keitai” in Adolescence :
Communication between Reality and Virtuality

Ai Noro

要 旨

本研究の目的は、学生青年が、仮想現実世界と現実世界との交流の視点から、ケータイあるいはメールによる友人とのコミュニケーションの特性をどのように捉えた上で、直接的で親密な人格的交流を築いているか、を明らかにすることである。本学学生95名のレポートを資料として分析検討した結果、次の4点の傾向がわかった。

1) ケータイ・コミュニケーションの交友関係の積極的支持者は、全体の約43%を占めており、ケータイへの依存傾向がみられた。消極的態度は約30%に相当し、また約27%の学生は両面の特性を指摘した。2) 友人とのつき合いは、比較的仮想現実世界において経験している者が多い。3) しかし、30%余りの学生は、友人との親密な人格的交流が直接的な相互交流の経験に基づくこと、すなわち現実の中で実現されると捉えている。4) レポートの結果を教授＝学習の結果と結びつけてみると、ケータイ・コミュニケーションへの積極的反応は、当該科目の評価BおよびC群に属している者に多く見受けられた。現実世界と仮想現実世界の交流を推進することの必要性が示唆された。

キーワード

学生青年、友人関係、ケータイ・コミュニケーション、現実世界と仮想現実世界

問題と目的

1 児童期および青年期における友人関係の発達的特徴とその歪み

青年期を語るいくつかの標識の中でも、少数の親密な友人を求める交友関係の重要性が青年研究において指摘されてきた(松井 1990)。親子間の関係変化、「心理的離乳」といわれる親や教師からの離脱を通して、自らの力で能動的に自分づくりの船出に乗り出すのである(落合・佐藤 1996a)。もちろん、青年前期(思春期)はまだ身体的にも、知的にも、社会的にも、そして何よりも経済的に弱々しく頼りなさの見える存在である。錨を下ろす新しい場所を自分自身の中に定め、それに依拠し、自らの力で自分自身を創っていかうとするが、身体も心も錨を繋ぎとめるにはまだ安定してはおらず、揺れ動いている。そうした自分のふがいなさに嫌悪感を持ち、自分への否定的傾向を強めるのも青年期の特徴である。

この時、悪戦苦闘し、もがく若者への理解を示さずに、叱責、忠告、指導また援助という形で露骨に土足で彼らの内面に踏み入ってくるおとなたちに対しては、徹底的に反撥・抵抗を試

みる。その対象となるおとなは、必ずしも親や教師など特定の具体的な人物とは限らない。むしろ、そうしたおとなを通して捉えられる、矛盾と不合理のおとな社会一般でもある。しかし、正面から立ち向かう相手としてはあまりに強大である。自分の弱さを思い知った若者は、おとなから逃避し、しかもおとなたちへの不満、反撥を共感し合え、安心を得られる場を見出そうとする。身近かな同世代の仲間集団がその居場所となる。彼らはおとな世代には異和感、不協和音を生じさせるような服装、言語表現や行為を共有することによって、うっとうしくダサイなおとなたちと違うことに存在を主張する。ときに、その主張は、暴力行為や反道徳的な実力行使を伴うことが起ってくるのである。

学童後期における友人関係の特徴とされたギャング集団の衰退という時代的現象は、青年期の発達の心理特性の歪みをもたらさないわけにはいかないだろう。かつて、ギャング集団は地域の子ども集団としてガキ大将の統率のもと、小学生数名から成る同性異年齢集団を構成していた。秘密の基地、合言葉、隠語を共有し、きまりを遵守、他集団に対する団結力を強めた。おとなからの干渉を排除し、協同の意識・「われわれ意識」を育んだ。「悪行」も目立つが「善行」も行い、下級生に対しては思いやり、上級生に対しては尊敬と憧れが特徴的であった。そこでは自己主張の仕方、けんかをした時の処理法を学び、集団的規律と連帯性を学習する場でありえたのである。また地域の遊び文化を継承し合う場であったといえる。こうして仲間の中で自己を鍛え合った学童期に引き続き思春期の子どもたちは、やがてアイデンティティをもった個人同士の内面生活にかかわる、深くて狭く持続的な交流を求めていく（落合・佐藤 1996b）。心の底から苦しみや喜びを共有し支え合い、人格的影響を及ぼし合う生涯の友（親友＝心の友）との交流が期待されるのである。それが青年期（とくに前期）の主要な発達の課題となった。

ところが、1970年代以降の高度経済成長期を通しての社会変動の中で、子どもたちは基地となる溜り場（空間）を失い、各種塾通いの多忙さにより集う時間と仲間を失うことになった。地域の街並みや露路裏はひっそりとした。あたかも「笛吹き男」に導かれて子どもたちが姿を消していったハーメルンの町のように（阿部 1988）。かくして、遊びのスタイルは孤立型の遊びへと傾斜し、変質してきた。ギャング集団やギャング・エイジのエクソ・システム化である。とはいえ、友だちとのつき合いが無くなったわけではない。2～3人の同質的な情緒的集団としての「仲よし集団」が入れ替ることになった。

それは互いに心理的同調性を基礎として仲よし自体を目的化しやすいので、馴合い、許し合い、いいかげんなところで分り合っている。また閉鎖的で他集団や自分が属するより大きな集団に対して無関心となり易く、公的なものと私的なもの、全体のことと個人的なものの区別がつけられない、さらに集団としての自治と自己規律を持たない、というような弱点を含みがちである。

友人関係が変質した形での児童期に接続する青年期の友人関係は、1980年、90年代には友人に甘えず、互いの領分を守り、友人との間に距離を置いてつき合おうとする「クールな交友群」（松井 1990）が特徴づけられた。さらに、友人との心理的距離を大きくとる一方で、協同的ではない、群れ志向の同調行動をとるだけの表面的な交友関係特性が指摘されてきた（上野 他 1994）。

かつて人格形成に影響を及ぼし合った青年期の友人関係は、親密な個人的交流関係を築くことにより保障されていた。親密な関係とは、個としての相手の全人格の信頼に立つ能動的な関

係をいう。当然、人格同士がぶつかり合う葛藤場面を体験することになろう。それ故、「親密な関係の獲得は、“個の確立”と共有されるものであるという点で、青年期にとって非常に重要な発達の意義をもっている」（藤井 1990）といわれるのである。現代の交友関係が、量的人数は多くても親密な関係、交流を避けて表面的な同調を共有する浅いつながりをもって特徴づけられることは、いかにも友人関係の希薄化を示すものといえるだろう。

2 現実世界と仮想現実世界の交流をめぐる

親密な人格的関係の獲得をめぐるの社会的スキル学習を促す研究がないわけではない。しかし、90年代以降のネットワーク社会とマルチメディア社会の急速な到来によって、青少年をとりまく情報環境が劇的に変ることになった。そして彼らのコミュニケーションスタイルや友人関係づくりの上に新たな、重い課題を提起してきているようにみえる。人間と人間による2者関係の直接的対面交流スタイルからメディアを通じた交流が主流になってきてはいないだろうか。情報の検索—選択と読み取り—活用—表現という一連の情報リテラシーの習得が期待される一方で、情報環境の拡大化や多様化の中で、とくに携帯電話の普及状況から友人関係の発達上、青年期の「親密で個人的な人格的交流」がどのように保障されるのかが問われる必要がある。携帯電話が市場に登場した80年代当初には、営業マンたちのアイテムにすぎなかったが、現在では若者コミュニケーションの道具であり、そしてアクセサリーの1つとなった。「携帯電話」という響き、イメージの重さに替って「ケータイ」や「ピッチ」が軽やかなイメージと共に普及に拍車をかけている（森 2004）。「この前、ケータイを家に忘れたとき、一日中タマシイを抜きとられたような気分だった。自分を含めて現代人はケータイに頼りすぎだと思う。」（吉村 2005）という大学生のつぶやきがある。

自戒をこめて使用している間はまだいい。ケータイ人間の心理構造がどのように人生を狂わすのか、悲惨な現実を小此木（2005）は指摘している。

彼（彼女）は、実際に現実の世界で歩いているにもかかわらず、どこか目の前の現実とは違う世界に心を奪われている、それはとても危い心の状態だ。

2006年6月、18歳の女性が山陽電鉄（兵庫県）の踏切で、列車にはねられて亡くなった。……中略……

つまりこの女性は、「踏切を渡る」「特急電車が来る」という現実の世界の中で行動しながら、心はもっぱら携帯電話を介した「彼方」の世界に注意を集中していたのだ。その結果、現実の世界でこんな事故に遇ってしまった。彼女は、現実の世界と、目の前の現実とは違う、はるか彼方のもう一つの世界との、二つの世界で暮らす、われわれ現代人の心理構造の犠牲者である。

歩行中といわず、電車やバスの中でも、教室の中でも、はたまた授業中も画面を見つめたり指を動かしたりしている若者がいる。心が外を向いている若者たちは、ケータイが1つの文房具的な道具だと認識している。そしてバーチャルリアリティに向う自分とリアリティの自分とが、2つの世界を住み分けてうまく利用している。しかし、使い分けがうまくできなくなり、バーチャルな世界がどんどん肥大化し、現実になっていくことで直接の現実が空虚となり、現実感の逆転が起こってしまう。

思春期の子どもたちは、空想・仮想の世界が人生の中でも比較的膨らんでいる。自己意識の高まりや衝動性も激しくなっている(榎本 1999; 長尾 1999)。それらを満たしてくれるメディアの世界に、現実の友人関係が希薄となっている彼らは容易に引き込まれる。高速バスジャック少年事件(17歳少年)、黒磯の教師殺傷事件(13歳少年)、長崎の幼児殺傷事件(12歳中1少年)、佐世保の同級生殺傷事件(12歳小6少女)等々、一連の事件に走った少年少女たちは、家族、先生やおとなたち、あるいは友人から見放され、孤立している不安な感情に怯え、苦悩していたことが報告されている(村山 2005)。とくに、佐世保事件についての家裁決定要旨の中では、交換ノートやインターネットを「居場所」と捉え、そこへの侵入が加害少女の怒りを募らせたことが殺害動機の1つとして認定されている点に対して、浜田(2005)は「たった一人の「居場所」はありうるか」と疑問を投げける。「居場所」は「私」一人だけの私空間をいうのではない、不安定になったときの「私」を支え、再びもとの「私」に戻ることができる信頼のおける仲間との共同空間をさすという観方に立っている。加害少女は、いわばそれまで確保していた「居場所」である仲間集団から孤立しかけていたのである。そのことが厳しく辛い状況であったとみれば、事件の因果を本人の特性、資質や両親の養育姿勢に帰着させてすむことではない。むしろ、事件の背景に隠された学校のバーチャリティをこそ問わなければならないという。少女たちの主たる活動の場である筈の「学校がほんとうの意味で子どもたちの生きる場になっているのかということ」(浜田 2005)を真摯に受け止めたい。

一人になることを怖って常に友だちが側に居たり、ケータイやメールでつながっていないと不安であるという関係が、現在では小学校高学年から中学、高校生に目立っている。彼らは、小此木の表現を借りるなら、「1.5の時代」に青少年期を過していることになる。つまり、人と人との2者(2項)関係を数値的比喻で $\langle 1 + 1 = 2 \rangle$ 「2.0」の関係で表わすが、人とかわる対象となる相手が、半ば人間扱いされたり擬人的機能を備えているという意味で「0.5」で表わされる。1.0の人間は本物の人間ではない物体に、あたかも本物の相手のような思いを託してそれにかかわる。このイリュージョン(錯覚)によるかかわりが、「1.5」の関係であるという。

代理物としての対象も遊び仲間のように思い込み、その思い込みを他者と共有することができる。「ごっこ」遊びが展開される。幼児においては、仮想の遊びの世界で人形を生きた赤ちゃんのように見立てて演じながら、他方で、本当は人形は人形というさめた現実的見方をもする。人形の中の異なるアフォーダンス情報を、仮想現実場面と現実場面とで転換させて対応するのである。ここで問題は、現実世界における直接的な生活経験がどのように裏打ちされているか、また現実世界と仮想現実世界との相互交流をどのように展開しているのかということであろう。少なくとも、乳幼児にとって長時間の映像視聴が注意・集中力や言葉の発達を阻害すると警告が、日米の小児科学会により提示されていることは看過できない(朝日新聞 2004.3.30)(田澤 2006)。

3 研究目的

仮想現実世界が肥大化するに伴い、子どもたちが現実世界と触れ合う直接経験の衰弱という実態が多くの人々によって指摘され憂慮されている。現実が存在するが、たとえばマス・メディアが伝える世界、歴史上の出来事、テレビのドキュメンタリー映像、ネット世界、記号世界等々の文字や情報機器によって模写された第2次経験としての仮想現実世界は、ブロンフェン

ブレンナー, U. が構想した5つの環境システムの中のエクソ・システムとみなされよう (Bronfenbrenner, U. 1979)。現在は直接参加できないが、青少年に対して影響力を行使しているエクソ・システムの世界が、ケータイやインターネット等の仮想現実世界であり、それとのかかわり方が今日的問題である。若者たちの友人とのかかわり方を捉えようとするとき、仮想現実世界と現実世界の交流の実態を理解しておくことが重要であろう。しかし、こうした視点からの心理学におけるアプローチは、今日進んでいるとはいえない。そこで、本研究では、学生青年たちが自分の友人とのつきあい方においてケータイ・コミュニケーションをどのように考えながら使用しているのかを検討する。上述したような友人関係をめぐる児童期から青年期までの発達上の問題性を、筆者は授業内容に取り入れて解説してきた。受講生である学生たちが、仮想現実世界と現実世界との交流についてどのように考えているのか、友人とのケータイあるいはメールによるコミュニケーションの特性をどのように捉えた上で、直接的で親密な人格的交流を築いているのかを明らかにすることが本研究の目的である。そのために以下の点について検討する。(1)学生青年のケータイ・コミュニケーション観を分析し、友人関係の特徴を捉える(2)彼らの友人関係には、仮想現実世界、中でもケータイという媒体手段によるコミュニケーションが顕著であろう(3)その際、現実友人との親密な人格的交流の可能性がどのように捉えられているかを探る(4)副次的には当該科目の教授=学習について自己点検評価を試みる。

方 法

筆者が担当する授業科目の受講生にレポート課題を提示し、その内容を分析資料として採用した。対象は、本学人間心理学科2年生単位習得者95名である。他に科目等履修生3名のレポートを参考資料とした。課題には「友人とのケータイあるいはメールによるコミュニケーションは、親密な人格的交流をどう保障しているか、自分自身の友人関係を通して考察しなさい」を示し、2006年7月上旬に実施した。青年研究の多くは質問紙調査法を採用しているが、ここでは自由記述による資料について質的な検討を考慮した。

結果と考察

1 学生青年のケータイ・コミュニケーション観の特徴

ケータイ・コミュニケーションが親密な人格的交流を保障しているかの問いに対しての、学生たちによる自由記述内容について、消極的観点、積極的観点および両面の観点到立つ態度と下位の諸特性を分析した結果が、表1に示されている。数値は複数の特性について記述された延数で表わされている。

この結果をもって、現在の学生青年の全貌を捉えることはできないが、友人関係をめぐる青少年たちの昨今の特性を踏まえるなら、一定の傾向を把握できる。資料分析の対象となった95名の全学生がケータイを所持していた。しかし、利用状況や考え方に違いがみられ、結果として友人とのケータイ・コミュニケーション観には多様性がみられた。

全体的には、ケータイ・コミュニケーションを交友関係において積極的に位置づけている場合が最も多く、反応全体の約43%を占めた。消極的な態度は約30%に当り、両面の特性に占

表 1 大 学 生 の ケ ー タ イ ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 観 の 特 徴

態 度	特 性	記 述 事 項 延 数 (%)
I 消 極 的	1 表情や身振り等の表現見えず誤解を与える	24
	2 ケータイの中の「友人」数と頻度増が自己目的化し「真の友人」を錯覚	23
	3 公的自己意識より私的自己意識が前面に（自己中心的表現となり易い）	16
	4 思考脱落の短文と記号では感情表現が困難	14
	5 仮想現実世界への片寄りにより現実世界とのバランス崩れ	12
	6 仮想現実世界の間人関係から現実世界の中での関係へ切り替えが困難	7
	7 通信ない時の新しい孤独感や不安の体験	6
	8 手続きなしに他者との対話中に侵入	3
	9 範囲制限、出費、興味なし	11
	小 計	116 (29.9)
II 積 極 的	1 緊急時の連絡、時・場所なく対応可能	55
	2 直接話し難いこと、ホンネを秘密裏に伝達	33
	3 心の癒し、安心・安定を導く	25
	4 双方向的コミュニケーションにより情報を能動的に発信可能	19
	5 適度な距離あり気軽に相談可能	15
	6 直接コミュニケーション困難者にとって人間関係の世界を広げる役割	9
	7 言葉を選び、見直し可能	5
	8 嘘をつく、言い訳や居留守を容易に	5
	小 計	166 (42.8)
III 消 極 ・ 積 極	1 対話者との地理的・心理的距離感の縮小	39
	2 直接コミュニケーションの補助として、最低連絡のみ	19
	3 現実世界と仮想現実世界との交流重視	17
	4 未知の人、不特定多数者との対話拡大	12
	5 大人の監視、干渉から解放、自由に通信	8
	6 現実の人間関係のしがらみから解放、対等の対話を容易に (敬語、儀礼的挨拶等の省略)	7
	7 多様な情報の利用（ネットで同調者募る）	4
	小 計	106 (27.3)
	計	388 (100.0)

める割合は約27%であった。もちろん、結論として消極的反応、すなわちケータイ・コミュニケーションは親密な人格的交流を保障するものではないとしながらも、ケータイに対して積極的にその特性を支持している、あるいは逆にケータイの消極面を指摘しながらも、結論は積極的な反応という場合もあるので、純粋に区別することは難しい。この点を考慮しながらも、ケータイ・コミュニケーションに対しての積極的支持者が多いことがわかった。その特性として、「緊急時の連絡に役立つ」「いつでも、どこでも対応が可能」というケータイの機能面からの指摘が最も多い。「直接会って（または電話で）話しにくいことをメールでなら伝えられる」「友人との2人だけの空間を持てる」「大事な2人だけの話を家族や周囲に迷惑をかけず、あるいは邪魔されることなくできる」等々、他愛もない話題を共有できるという点に、親密性を感じている。

〈事例1〉

私たちは、「一人にはなりたくない。しかし、自分の世界に入り込んで欲しくない」というような矛盾した欲求を少なからず持っている。「孤独を感じない程度に親しく、深い部分にまで踏み込まれない程度に距離を置く」という友人関係を求めているのだ。

携帯電話を持つことによって、まず、自分はひとりだという孤独感がなくなっていく。例えば実際に連絡を取っていなくても、メモリーに名前が登録されていれば友達だと思う、自己満足。一人きりで居ても、いつでも誰かと連絡が取れる、安心感。そういった効果が携帯を持つことにより得られるのだ。

また、携帯電話を使えば自分の世界から他人をシャットアウトすることが簡単にできる。直接会ったり電話で話したりするより、メールは嘘をつきやすいという特徴があるからだ。例えば、休日は一人でいたいと思っていた時に友達から遊びの誘いを受けたら、直接会って「一人で居たいから」と断りを入れるのは抵抗があるし、かといって咄嗟に都合のいい言い訳は思いつかないだろう。しかし、メールなら言い訳を考
える時間がとれる。メール上なら実際の自分とは違う自分を作り出せるので、断るのが面倒だと思っていたとしても、全くそんなことを感じさせない文面を送ることができる。……後略……

(A.M. 女子) (下線筆者による)

上の〈事例1〉のA.M.は、友人関係を維持するのにケータイ・コミュニケーションが重要な役割を担っているとしながら、「携帯電話が無ければ維持できない関係に意味があるのかと疑問も感じつつ」自分も相手も傷つかず、お互いにこれが良い関係だと信じている。傷つき合うことを避けるだけのつきあい方は、果して相手への思いやりといえるのか、むしろ学童期以来の、事後処理の術を知らない「仲よし」の関係を引きずっている問題ではないかと考えられる。

学生の中には、1日20～30件くらいものメールをしているという。直接的な対話の方が親密な関係を築けるように感じるし、ケータイでは現実味が薄いと感ずても、ケータイの気軽さ故に、親密な交流を育むことが可能になったともいう。マスメディアの場合の一方向的で受動的なコミュニケーションとは違って、メールやケータイは双方向的なコミュニケーション手段として、情報を能動的に発信できるというメリットの指摘も目立っている。

〈事例2〉

毎日使っているケータイや電子メールによるコミュニケーションは、私と友人との親密な人格的交流をどのように保障しているのだろうか。私は普段から友人とメールや電話のみでの交流（付き合い方）をしないようにしている。なぜなら、メールやケータイ電話だけでは本当の会話はできないと思っているからだ。会話というのはただ言葉のやり取りではなく、その言葉を発したときの声の調子や表情からも、相手の思っていることや感情をお互い推測しながら言葉を交わすことが、本当の会話だと思っている。だから、相手の表情や感情が見えないケータイ電話や電子メールによるコミュニケーションの方法で、人間同士が親密な人格的交流が保障されているとは思わない。……中略……

ケータイやメールは通信のための道具であるのに、私たちはいつの間にか友人や全く知らない人ともケータイやメールで繋がっているように感じ、ケータイやメールに依存して生活しているように思う。ケータイの中の「友人」とのやり取りで親密になったような錯覚に陥ることもある。本当の自分を曝け出す必要がないし、相手のことも全て知る必要がないからこそ、すぐに仲良くなったり親しい関係になれたりするのだろう。しかし、これは「真の友人」と錯覚しているだけだと思う。私自身、ケータイやメールのやり取りだけで誰かと親密な関係を持ったことはないし、持てるとも思わない。……後略……

(T.M. 女子) (下線筆者による)

〈事例3〉

今日、人々は心が孤独化してしまっている。そのため、気軽にメールできる相手を見つけ、メールすることにより孤独感から逃れようとする傾向がある。それは一見、親密な関係になり得るようだが（例えば、「私はあなたの親友だよ」というような文のやり取り）、文面上だけでは本当にそう思っているのかわからない。メールだけのコミュニケーションでは、相手が何を考えているのか読み取ることができないのである。それ故、些細なメールのやり取りで友情関係が崩れることもある。また、メールをシカトしたり、されたりする、コミュニケーションの放棄もよく起きる。実際、私も以前仲が良かった友だちからメールをシカトされて不快な気分になった事がある。コミュニケーションの放棄は、メールだからこそ起ってしまうのである。この点からメールによるコミュニケーションは、親密な人格的交流を必ずしも保障していないといえる。……中略……

コミュニケーションは、人と人々が直接接し合っ初めて完璧に成り立つものだと私は考える。そして言葉と表情で会話する。表情からはその時の微妙な気持ちさえも読み取ることができる。直接コミュニケーションをすることは、人間関係を築く上でとても大切なことなので、ケータイやメールにあまり頼らないように気をつけたい。

(I.A. 女子) (下線筆者による)

〈事例4〉

自分自身の友人との交流では、実際に会って顔と顔を合わせて話をし、少し仲よくなったところでようやくケータイやメールによるコミュニケーションが始まる、というパターンであった。

(A.T. 女子)

〈事例5〉

私が携帯電話を持っていない頃は、周りの友だちもほぼ持っていなかった。しかし徐々に携帯電話を持っている友だちが増え始めると、それを持っている2人の友だちと会ってメールが話題になったとき、携帯電話を持っていない私は、仲間はズレにされたような感覚になった。……中略……

ケータイを持つようにはなったが、メールだけで繋がっている人は、あまり親密ではない。実際に、ケータイアドレスに登録されている人の中にも、全く連絡をとっていない人が結構な人数いる。面と向かったコミュニケーションによる親密な人格的交流があることを前提に、ケータイ・メールでお互いを気にかける手段として保障されるのではないかと考える。

(S.T. 女子) (下線筆者による)

〈事例6〉

携帯電話の利用のみで確かな友人を作ることにはできないと考えている。まして、親友といった自身の内面に深く関わり、あるいは彼の内面に関われるような関係を構築することなどは、まさしく夢でしかないだろう。これまでの経験歴の中で、ケータイで個人の内面に深く関わったことは、まずない。また、こちらからそれを利用して私の内面を晒したことも同様にして、ない。何故なら、受話器の向こう側から聞える声からは、どうしても「真実味」が感じられないからである。それは「うそ臭さ」、「虚構」、「非現実性」というものを感じてしまうと言い換えることもできる。……中略……

情報伝達機構としての表情や些細な動作が必要な要素であること、ノンバーバルコミュニケーションの役割について講義を通して学んだ。事実、私が構築した人間関係の中で、電話やメールを用いて作り上げた友人関係は一つとしてない。全て直接対面して相互理解を深めての結果である。

また、携帯電話が保持している欠点の中で最も重要なものは、相手の都合を考えないという側面である。……中略……

相互理解というものが友人関係を深めていく最良な手段であると考えられる以上、対人コミュニケーションの補完的立場で限定的な位置付けで考えるのであれば、携帯電話は相互理解を深めるのに有効な道具であると考えられる。

(M.K. 男子) (下線筆者による)

〈事例2〉〈事例3〉〈事例4〉の内容によると、ケータイ・コミュニケーションは友人との親密な人格的交流という視点では消極的反応として示されている。お互いの表情や身振り、仕種等がみえないので情報が制限されてしまい、相手に誤解を与えること、そのために「友人関係が崩れる」、また、ケータイ世界の中での「友人」の人数（メールアドレス数）を増やすことが自己目的化するあまり、親密な人格的交流を可能にする「真の友人」を見失ってしまうことへの懸念がみられる。

〈事例3〉の指摘のように、気軽さという効用がケータイ依存に取り込まれていき易いこと、ケータイ世界では、いつもスイッチをオンにして自分を開放しているようでありながら、誰からも送信してこない時の期待外れや寂しさという「新たな孤独感」を体験することになる。ケータイ依存と孤独感、不安感とは表裏一体であることがわかる。

友人関係がケータイで結ばれていくと、仲間はずれを経験することも起りうる。現在では、若者たちのライフスタイルともいべき「ケータイ依存」は、どのようにして生れてきたのか。前述したように急激な社会変動、とくに情報革命を背景に若者たちの希薄化した友人関係を埋めるべく登場したのであろう。

然るべく業界のキャッチフレーズに乗った形で、ケータイは未知の人あるいは不特定多数の人との対話のきっかけをつくっている。「メールアドレスを教えて」—「ありがとう。私のアドレスも送っとくね」。これで友人関係の成立。メールのやり取りを重ねるうちに親密さが増してくるというわけである。しかし、あくまでも仮想現実世界における人間関係であり、この関係を過度に体験するあまり、その切り換えがうまくできずに現実世界の中での適切な人間関係に困難を抱えることにもなる。メールの世界では、他者から自分がどのように見られているかという意識、いわゆる公的自己意識よりも、自分の気持ちや考えなど自分の気持ち、内面に目を向けること、私的自己意識が前面に出易い。つまり、他者の立場・視点を考慮せずに「自己チュウ」（自己中心的）の表現となり易い。ケータイについて「いつでも、どこでも」利用できるという利便性を強調することは、相手の都合を、場合によっては無視して発信し合うことに結びつくことになろう。

積極的な意味では、相手の役割（身分、地位、年齢、性等）にとらわれずに現実の人間関係のしがらみから解放されて、たとえば、敬語や儀礼的挨拶を省略するなど、対等の対話を容易にするものである。同様に、親や教師等の身近な権威者の監視・干渉から解放されて、自由な応答への道を開いている。しかし、他方で、現実世界の中での他者とのコミュニケーション場面に、ケータイで突如、手続きなしに侵入してくる。すなわち、「入れて」—「いいよ」という対話の基本、人間関係の基本を心得ない事態が展開する。通話中には、現実世界の中の相手は置き去りにされたままになってしまうだろう。

2 友人関係における現実世界と仮想現実世界との交流

前述した結果により、学生たちの約4割はケータイ・コミュニケーションが友人との親密な人格的交流の保障を支持していることがわかった。つまり、彼らは友人とのつき合いを専ら仮想現実世界において経験していることを示している。また3割弱の学生たちは仮想現実世界と現実世界とのバランス取りに揺れながら、バランスが崩れて、ややもすると仮想現実世界への片寄りをみせながら現実世界との混同の状態にあると考えられる。そして約3割に当る学生青年が、友人との親密な人格的交流は直接的な相互交流の経験に基づくこと、現実世界の中で実現されると捉えていることがわかる。彼らはもちろん、ケータイの利用者ではあるが、最小必要な連絡のための使用に留めている。現実的に直接的コミュニケーションが困難な人（言語障害者、入院患者、引きこもり者、不登校生等）にとって、人間関係の閉塞感から離脱し、経験世界を広げる道具として有効であること、対話者との間の地理的、心理的距離感の縮小に役立っていることを受け容れている。

したがって、前述の〈事例5〉および〈事例6〉の見解にみられるように、ケータイは直接的対人コミュニケーションを補完する道具の1つに位置づけられよう。そして現実世界と仮想現実世界との適切な交流が望まれる。

友人のホンネであるところの内面を正しく理解するためにも、彼らが提供する多様な情報を利用することは有効であろう。たとえば、第2次経験としての仮想現実世界の中でケータイが

発信する彼の文字情報、第1次経験としての現実世界の中での face to face の相手の肉声の言葉、表情、身振りや仕種等の情報、あるいは違う場面で発せられる彼の情報を総合的に捉えることを通して、相互の特性や相性を確認し合うことに意義があるといえよう。その際、現実世界の中でのコミュニケーションが貧弱あるいは皆無のまま、ケータイやメールでのコミュニケーションの世界が肥大化してしまうと、その通信相手を仮想現実世界の中で創られた「コピー人間」(小此木 1993)として現実世界の中でも、その人に対して同様な対応をしてしまい、そうした混同やずれが2人の関係を破綻に導くかもしれないのである。

青年後期の友人関係について、友だちや親友と区別される仲間関係を位置づけた難波によると、仲間には比較的高い親密さの他に、目的・行動の共有の顕著さの高いことが見いだされた(難波 2005)。

現実世界へ適切に対応していく上で、目的・行動の共有という観点から仲間との信頼関係を構築することが期待される。現実の社会で情報についての思い違いが生じ易い。現実への洞察力を共同学習を通して育みながら、共同の自己実現の成果が社会の現実へ反映されていくことが大切であろう。青年期における友人との親密な人格的交流は、次期のおとなたち実社会の展望に連なる活動として重視したい。

3 教授=学習活動の評価

本学に学び、学生生活に参加している学生たちは、「自分探し」に取り組みながら友人関係を自分たちとしてどのように考えているのかを探ってきた。ケータイ・コミュニケーションに対する考え、レポートの分析を通して見えてきた特性ではあるが、他方では筆者の授業内容とかかわる資料であった。学生たちのコミュニケーション観の実態と共に、教授=学習の結果として受けとめる必要がある。

表2では、当該科目における学生たちの評価とケータイ・コミュニケーション観との関連を示した。成績には筆記試験結果、レポート結果および平常点の総合的結果として、Aは80点以上、Bは70～79点、Cは60～69点を換算して示されている。ケータイ観は、表1における消極的態度、積極的態度および消極・積極両者の態度のいずれかに主として分類された学生数による。

表2 ケータイ観と当該科目成績 人(%)

成績 \ 反応	消極的	消極・積極	積極的	計
A	15 (15.8)	20 (21.1)	16 (16.8)	51 (53.7)
B	5 (5.3)	10 (10.5)	20 (21.0)	35 (36.8)
C	2 (2.1)	2 (2.1)	5 (5.3)	9 (9.5)
計	22 (23.2)	32 (33.7)	41 (43.1)	95 (100.0)

表2によると、ケータイに対する消極的反応および消極・積極的反応は、Aの評価群に多いが、積極的反応はBおよびCの評価群に属している傾向がみられた。つまり、積極的にケータイ・コミュニケーションを受け入れて取り組んでいる学生は、授業中もケータイの中の仮想現

実世界に注意、関心が向いているのではないか、そこで結果的に授業内容の理解に弱さが生じたのではないかと推測される。授業方法の検討と共に、仮想現実世界に揺れる学生青年たちの心理を検討する課題が残された。現在のように、「精神の機械化」が進行する中であって強調すべきは、日常的な第1次の経験の復権であり、媒介的、第2次の経験を結びつけていくこと（リード 1996a）、すなわち、現実世界と仮想現実世界との交流の課題である。リード, E.S.によれば、個々人が環境と相互的に関係しあう意味は、環境の中に埋蔵されてある多様な発達の資源（アフォーダンス）を探索—検知（発見）—利用の経過の中に捉えられる（リード 1996b；野呂 2004）。それ故、日常生活にしろ、教育場面や労働場面にしろ、現実世界と直接かかわって、ありのままの第1次経験が衰退することは、人間が環境とかかわる基本的な探索能力を失わせることになる。あらゆる経験が同等というわけではないが、経験は形成もされ、磨かれもし、向上することもある。そして希望とは「目標達成の手段のヒントになる情報を、経験の過程で検知することである」と捉えていることに学びたいものである。

文 献

- 阿部謹也 1988 ハーメルンの笛吹き男 伝説とその世界 ちくま文庫
- Bronfenbrenner, U. 1979 The Ecology of Human Development, Experiments by Nature and Design, Harvard College
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教心研47 P.180～190
- 藤井恭子 1990 「友情・親密な関係」久世敏雄・斎藤耕二監修 青年心理学事典 福村出版 P.253
- 浜田寿美男 2005 子どものリアリティ 学校のバーチャリティ 岩波書店
- 松井豊 1990 「友人関係の機能」斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 P.288～295
- 村山士郎 2005 事件に走った少女たち 新日本出版社
- 森祐治 2004 「解説3 ビジネスとしてのケータイ 日本で携帯電話がケータイになった理由」 T.コボマー（川浦康至・溝淵佐知・山田隆・森祐治 訳+解説） 北大路書房 P.153～163
- 長尾博 1999 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教心研47 P.141～149
- 難波久美子 2005 青年にとって仲間とは何か：対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から 発心研 16-3 P.276～285
- 野呂アイ 2004 「人間科学としての人間関係論 — その生態心理学的アプローチ」 現代のエスプリ 447 至文堂 P.21～32
- 小此木啓吾 2005 「ケータイ・ネット人間」の精神分析 朝日文庫 P.24～25
- 落合良行・佐藤有耕 1996a 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教心研44 P.11～22
- 落合良行・佐藤有耕 1996b 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教心研44 P.55～65
- Read, Edward S. 1996a/2000 アフォーダンスの心理学 — 生態心理学への道（細田直哉訳 佐々木正人監修）新曜社
- Read, Edward S. 1996b The Necessity of Experience, Yale Univ.
- 田澤雄作 2006 テレビ画面の幻想と弊害 悠飛社
- 吉村英夫+シネカブ編 2005 父よ母よ・大学生の一行詩 大月書店 P.153

付記

資料提供を快諾してくださった学生みなさんに感謝いたします。